

NPO法人 自然と緑

特定非営利活動法人 自然と緑

代表者 伊藤 孝美

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-18

大阪市教育会館 5 階

TEL : 06-6809-1700 FAX : 06-6809-2702

E-mail : info-sm@shizen-midori.org

URL : <https://shizen-midori.org>

NPO 法人自然と緑会報 2025 年 9 月 1 日発行第 144 号



【特別寄稿】自然と緑のクラフト活動

自然と緑理事 西田 博

クラフト活動は 6 月と 12 月に季節に合った自然の素材を生かした作品作りをしています。その他作品展や物品販売なども行っています。

春の活動では流木盆栽をしました。流木に苔を張り、クヌギやモミジの苗を苔玉に植え込み、焼杉板と竹炭の台座にセットし、ムクロジ、ドングリ人形などのフィギュアをあしらひ、生活の中で、グリーンの癒し空間を楽しんでいました。

流木は淀川でのジョギングや木津川のデーキャンプで白骨化したものを集め、苔は生駒山麓登山道の石垣や側溝についているハイゴケ、スナゴケなど少しずつ用意していきましました。「思ったより出来栄えがよかった。」

「楽しかった。」という感想をいただきました。昨年ツリシノブを作ったリピーターの方からツリシノブが成長している様子を写真で見せてもらって感激しました。

10 月 26 日に「水都おおさか森林の市」、11 月初旬に「斑鳩産業まつり」があり、リース作りやクラフトの展示即売会をします。素材集めや作品制作など 9 月～10 月に行いますのでご協力いただけたら幸いです。

12 月には正月飾りとドライフラワーリース作りを予定しています。



流木盆栽



流木盆栽作り



斑鳩産業まつり



根茎から葉を茂らせた
ツリシノブ

自然と緑 正会員の皆様へお知らせ

昨今の事務所経費や事務所家賃等の値上げにより、経費面で事務所の運営が行き詰まっております。そのようなことから、今年 6 月の総会において会費の値上げを申請し受理されました。正会員の皆様には大変心苦しいのですが、次の通り 2026 年 4 月より会費の値上げを行いますのでご了承を宜しく御願い申し上げます。

- ・正会員の年会費 5,000 円 ⇒ 6,000 円、
- ・賛助会員、家族会員は変更ありません。

NPO 法人 自然と緑 事務局

—144号目次—

p 1	特別寄稿「自然と緑のクラフト活動」	自然と緑理事 西田 博
p 1	自然と緑正会員の皆さまへお知らせ	自然と緑事務局
p 2～3	渡辺弘之の未解決事件簿 (26) ツチノコ (植の子)	自然大学学長 渡辺弘之
p 4	さいとうさんの“話のタネ” (71) ヤマユリなど	前自然と緑理事長 齊藤 侑三
p 5～7	第29期自然大学実習感想文「芦生研究林」	第29期自然大学受講生
p 7	「これなんだろう・何故だろう」	自然と緑理事長 伊藤孝美
p 7～10	第29期自然大学実習感想文「琵琶湖」	第29期自然大学受講生
p 10	会報川柳	自然と緑理事 神崎トモ子
p 11	観音竹の花が また咲いた	自然と緑理事 竹内 一郎
p 11	「これなんだろう・何故だろう」の答	自然と緑理事長 伊藤孝美
p 12	寄付等の御礼 活動報告／編集雑記	自然と緑会報 編集部

渡辺弘之の未解決事件簿(26) ツチノコ(槌の子)

自然大学学長 渡辺弘之

身近なところでの目撃談

ツチノコ(槌の子) 出没の話は北海道を除き、全国に広くあるようだ。大きさはビール瓶くらい、細い尻尾があり、動くときは尺取り虫のように伸び縮みするとか、タイヤのようにゴロゴロと転がる、さらには角を出す、鱗でなく毛がはえているといった話もある。日本の未確認動物の代表だろう。私自身、一時、ツチノコを含め北海道屈斜路湖のクッシー、鹿児島大隅半島の池田湖のイッシー、広島県比婆のヒバゴンなど、いわゆる未確認動物(UMA)に興味を持ち、資料を集めていた。日本ではUMA(Unidentified mysterious animals)と呼ばれているが、UMAは和製英語で、英語ではCryptidというようだ。日本でも未確認動物に関してはたくさんの本が出版されている。

第一次ツチノコ・ブームの昭和40年(1965)代当時の新聞報道ではツチノコは2~3mほど跳ぶことができるとか、眠ると大きないびきをかくというのさえあった。ツチノコは毒蛇で咬まれて即死した人がいるともされた。

勤務していた芦生研究林(京都府南丹市美山町)にも目撃情報があった。ツチノコにはバチヘビ、テンコロ、ゴハッスン、ノヅチなど60もの地方名があるようだが、芦生ではヨコヅチといていた。福井県境に近い櫃倉谷の奥でみた、玉のようになってものすごく早かったとか、毒をもっているといっていた。ある家の屋敷内にもでてきたが、その家は跡取りがなく没落したともいっていた。

ここではどうもツチノコは凶とのイメージでとらえられているようだった。ともかく、ツチノコ目撃例のあるところに住んでいるのである、ツチノコが何者かの問題を私が解決してやると、ちょっと本気になっていた。

ここに、そのツチノコが「確実にいる」と思ったのは、林内におばさん3人でフキ採りに行ったら、小さな谷でツチノコがでてきたという。その日の夕方、3人に尋問した。3人の位置関係を別々に尋ねると証言は一致する。「mamushiか」と尋ねると、「ちがう」、「オオサンショウウオか」と聞くと、「これではない、見た



マムシ

たこともないものだった」とみんない

う。山の人たちである、毒蛇mamushiとほかのヘビとの区別は確実にできる、オオサンショウウオも昔は食べていたところであるが、それではなかったという。見たこともないものだったというのだから、見当がつかない、身近なところ、ここ芦生に確かに何かがいると思ったが、その後、まったく進展がなかった。

斐太猪之介『山がたり』(文芸春秋社、1969)に奈良・吉野の神社にあるツチノコの骨という写真がのっている。生存の確かな証拠かと思ったが、通勤途中の電車の中で、魚の分類学の教授にこの写真を見せたら、「胸骨が発達しています、哺乳類の骨ですね、大きさ



オオサンショウウオ

からイタチでしょうか、ツチノコは爬虫類の仲間だとしたら、これはツチノコの骨ではありませんよ」と明確に否定された。

髪の毛の焦げる匂いが好き?

京都の溪流釣り同好会・ノータリクラブの山本素石さんに会ったことがある。昭和34(1959)年8月、京都・北山で溪流釣りの最中にツチノコを見たという人である。話しても誰も信じてくれないので、自分で捕まえるとむきになっていた。ツチノコを見た時の絵を描いてもらったが、眼が大きく、背中にはmamushiに似た模様がある。絵からはどう見てもmamushiだ。ツチノコを捕まえるのに、ツチノコは髪の毛の焦げる匂いが好きな

ので、理髪店で髪の毛をもらい、これで誘き寄せているといていた。髪の毛の焼ける匂いははっきりしている。しかし、どうして髪の毛の焼ける匂いが好きとわかったのか、そのとき確かめていない。

昭和 47 (1972) 年 8 月、NHKテレビ「ふるさと動物記」で大阪大学教授の佐藤磐根さん、ノータリンクラブの山本素石さん、それに私で鼎談をしたことがある。山本素石さんのツチノコ目撃談に佐藤教授はそんなものいないと反論し、私は芦生にも各地に目撃情報がある、ツチノコ自体、あるいはこれと間違われた何者かがいる、注目を集めているので、近々、正体がはっきりするのではないかと話した。

その後のこと、京都府庁林務課に勤める知人から、担当の山林内で「しょっちゅうツチノコがでてる、捕まえたら君の所へ送ったらいいのか」と聞かれた。まさかと思ったが、「ともかく、すぐに電話して下さい」とお願いしたのだが、その後、まったく電話はなかった。これら未確認動物の話題はしばらく続き、科学朝日 1988 年 6 月号 (通巻 569) に特集ニッポン「幻の動物記」が組まれた。



ツチノコ (画：山本素石)

まだ未解決のまま？

つい最近 (2024 年 10 月 19 日付け朝日新聞) も、徳島県勝浦町の図書館にこの地域でトックリヘビと呼ぶツチノコの標本が 30 年も保管されているという記事があった。普段は公開されておらず、写真撮影も禁止だという。1989 年 6 月に捕獲され標本として寄贈されたものだ。新聞には撮影禁止だというツチノコ? の写真が掲載されているが、ビール瓶のように太く短いというイメージとはちがひ、結構大きなヘビだ。学芸員の見方がつけられているが、ネズミなど大きな餌を食べたあとのアオダイショウではないかとしている。ちょっとがっかりだが、ツチノコはまだ注目される存在だ。

各地にツチノコ目撃情報があったことから、懸賞金がつけられ、捕獲に拍車がかかった。糸魚川市、岐阜県東白川村、奈良県下北山村、兵庫県千種町、岡山県吉井町などで、次々と懸賞金が発表された。懸賞金も兵庫県千種町が生け捕り 3 億円、死体で 1 億円、糸魚川で 1 億円というところまでいった。この千種町は市町村合併で宍粟市になっている。この懸賞金、現在でも有効なのかどうか確かめていない。

現在、ツチノコの正体はヒキガエルを呑み込んだヤマカガシだとされているようだが、ヤマカガシは結構長く、ちょっとビール瓶にはみえない。最近、これはペットで飼っていたオーストラリア・パプアニューギニア産のアオジタトカゲとかマツカサトカゲが逃げ出したものだとされているようだ。しかし、これらのトカゲには脚がある。ツチノコには脚はないだろう。それも逃げ出したものなら、都市域での目撃が多いはずなのに、目撃例は山村に多いことでも納得できない。それよりも、これらは熱帯産の動物だ、寒い日本では越冬や繁殖はとてもできないだろう。

ツチノコで村おこし

古事記や日本書紀に登場する野槌神の記述や『和漢三才図絵』にも記述があることから、このモデルはやはり日本の動物であろう。現在では「どらえもん」や「ちびまる子」にも登場するほど、認知されている。岐阜県東白川村には「槌の子神社」まで創建され、道路にも「ツチノコ注意」の道路標識が立っているそうだ。

これだけの目撃例がありながら、今もって明確に解決しないのが少々気になる。いないものが捕まるはずはないとの思いもある。私自身ではっきりさせてみたかったが、高額な懸賞金にはちょっと醒めてしまう。山本素石さんは『逃げろツチノコ』(山と溪谷社 1973) の中で、最後に「捕まるな、逃げろ」といった。私も、その心境の変化が理解できる。「一目、私にだけ姿を見せ、そのあとは決して出てくるな、つかまるな、ツチノコだ。」

参考書 笹間良彦：図説日本未確認生物事典 柏美術出版 (1994)

さいとうさんの“話のタネ” (71) ヤマユリなど

前自然と緑理事長 齊藤 侑三

植物を覚えようと1995年9月21日「学生版牧野植物図鑑」を購入した。表紙がヤマユリで美しく印象的な花であった。



オニユリ



テッポウユリ



タカサゴユリ



シンテッポウユリ

ヤマユリは中部以北の山地はえる多年草。ユリ科ユリ属。高さ1～1.5m。花期は6～8月。香りの良い白い花を横向きに数個つけ、大きい花は25cmくらい。草花の中では最大級の花。自生地ごとに吉野百合、叡山百合、鳳来寺百合、鎌倉百合、関東百合、多武峰百合、箱根百合等があり、狐百合、香百合、白百合、筋百合、匂い百合、料理百合と別名で呼ばれる。世界中のユリで最も大きな花をつけ、ユリの女王とも言われる。1873年のウィーン万博で日本から他のユリと共に紹介され、その美しさから一大センセーションを起こした。球根は大正時代まで主要な輸出品の1つ、栽培品種の母株として重用された。品種改良されカサブランカなど逆輸入された。

実生から開花までには3～5年かかり、株が古いほど多くの花をつける。鱗茎は「ユリネ」と呼ばれ苦味が少ないため古くから食用とされてきた。縄文時代には既に食用とされていたとも考えられている。私が初めて見たのは2014年7月奈良県の高松塚古墳の近くだ。ユリの蒴果は3つに裂けるが細い網状の糸があり種が真下に落ちない。風が揺れて網状部分から風が入り種が上に出て遠くに飛んで繁殖する。風に吹かれて揺れるから名前の由来は「揺り」→「ユリ」となった。また、鱗茎が寄り添っているから「より」→「ユリ」の説もある。

日本には15種類の実種が確認。ヤマユリ、カノコユリ、スカシユリは日本固有種。ユリの花は花弁の付け根が塞がっているが、中心が透けているスカシユリもある。花言葉は人生の楽しみ、荘厳・威厳、純潔、甘美、飾らぬ愛など。

「百合」は、万葉集では、「由理」「由利」「佐由利」の表記があり「ヤマユリ」「ササユリ」のことをさすと思われる。

オニユリ、ヤマユリ、ササユリ、テッポウユリなどは、鎮咳（ちんがい）、鎮静、滋養、強壮、解熱、利尿（りによ）薬とする。また、ユリ根を、食用とするため栽培されるのがヤマユリ、コオニユリ、オニユリの3種。

タカサゴユリとテッポウユリはよく似ている。違いはタカサゴユリの花期が7～9月。花弁に淡い赤筋がある。テッポウユリの花期は4～6月。花弁に筋はない。開花時期が違ふことと葉の形が違ふ。梅田のビルの谷間で見かけたシンテッポウユリは別名ホソバテッポウユリ（細葉鉄砲百合）。1951年に日本で開発された園芸品種でタカサゴユリとテッポウユリの交配種。開花は8～9月、草丈は70～150cm、葉は細長い。2025年家のシンテッポウユリ

の草丈が2mを超えた。繁殖が良すぎるので環境省の「生態系被害防止外来種リスト」に指定されたので殻が青いときに切っている。「立てば芍薬（しゃくやく）、座れば牡丹（ぼたん）、歩く姿は百合（ゆり）の花」ということばがある。美しい女性をたとえる表現だ。



ヤマユリ



カノコユリ



エゾスカシユリ



ユリの殻



ユリの種

《1班》

○今回、何の前知識もなく京都大学芦生研究林の実習に参加しました。地名の読み方も知らず、当然京都府のどの位置にあるのかも知りませんでした。当日、園部からマイクロバスで移動した時も、美山町のかやぶきの里からまだ奥へ行くの！と驚いたほどです。芦生 1 日目、七瀬谷のトロッコ道を歩きながら周囲の植物の説明を受けるのは実習の定番ですが、渡辺学長から芦生研究林の土地を使用収益するため99年間の地上権設定をしたとの話をお聞きしてびっくり！（地代払っているんだ”（-”-”）”。2 日目は歩いて出発か……と思っていたら、マイクロバスで1時間弱、長治谷小屋まで移動。林道は凸凹が多く、マイクロバスは満席で車体下がっているせいか、何度も底をこすったり当たったり。一番後ろの左端に座っていたので、ガードレールのない道の横の深い谷を見て肝を冷やしました。マイクロバスを停めて見学させてもらった桂の大木には感動！シンとした空間に落葉の甘い香りを漂わせ、様々な着生植物を纏って立っている巨木の佇まいに神々しさを感じました。長治谷作業所から由良川源流への上谷コースでは、あちこちの杉の木に見られる熊剥ぎの被害に熊が出るんじゃないかと心配し、サルナシの実を食べて美味しさにほっこり。芦生杉の伏状更新に木の生命力を感じつつ、日本海側と太平洋側の植物が混在しているという話に種類の多さを実感しました。捕まえられたアカハライモリのお腹の赤地に黒の斑点模様、ちょっとグロテスク感ありながらも、頭を振って足をバタバタさせ「やめてー！」と言っているようで可愛く思っていました。途中、何となく木々の間がすっきりしているなど思っていたら、鹿が食べてしまっているとか。奈良もそうですが鹿、恐るべし！です。野田畑からの上谷の川渡りは、何度となくありましたが、浅瀬を選んでいただいたり、手を取っていただいたりで長靴に水が入らず渡ることができました。観察指導員の方からのマイクロバス内での鹿のおしっこを泥に混ぜて首にこすり付けるヌタうち、ヒルが取り付いているのを血だらけになりながら除去する話は思わず顔が引きつってしまいそうでした。日頃の運動不足が祟ってか、終盤しんどかったのですが、森林浴のおかげかすっきりとした気分で帰ることができました。実習の時はいつもそうですが、事前の準備や資料作成、当日の手順、参加者の安全



トロッコ道で植物観察



大トチノキ前で渡辺学長講義



野田畑湿原で渡辺学長講義

全についての配慮等々、スタッフの方々の努力があつて、はじめて楽しく参加させていただけるのだと感謝しています。

《2班》

○足元に不安を感じつつもどうしても芦生の森に行きたかったので参加しました。2 班リーダー橋田さんのご配慮に感謝しつつ、危険な川渡り等で手を引いていただき無事に歩くことができました。芦生の多様な森は樹木大好きな人間にとって大変興味深く、初めて見る樹木ばかりでした。日本海側、太平洋側の両方が見られる。特に印象的なのは芦生杉と他の杉との違い、サワフタギのブ

ルーの実、風に揺れるヤマナラシ、多様な木と共生するトチノキ等々きりがありません。芦生は宝の山です。スタッフの皆様ありがとうございました。一生の思い出ができました。

《3班》

○杉の皮のクマ剥ぎの被害による杉の立ち枯れの問題、アシウスギの「伏状更新」(雪の重みで垂れ下がった枝が接地し、そこから根を出し育っていく)、ナラ枯れ、オニグルミとサワグルミのこと、木の上に産卵したモリアオガエルの卵から下の池に落下してくるオタマジャクシをイモリが食べるという話、太平洋側のブナの葉と日本海側のブナの葉の違い等、色々な話を聴き、歩き、見て、感じさせてもらいました。中でもブナの種子や幼苗のシカの食害防止のための「鹿柵」設置については、たいへん苦労されていることを知りました。「鹿柵」は食害を防止する土地の周囲 1.9 kmにわたり設けられ、設置される多くの場所は傾斜地となっている。「鹿柵」は雪に押しつぶされてしまうため、冬が来る前には、撤去し、春が来たら再び設置する。設置に際に、シカが隠れ、潜んでいて、見つけれないまま「鹿柵」を設置してしまうこともあるとのこと。「鹿柵」の設置・撤去の苦労や労力はいかほどのものかと思い、感心しました。4,178ha という広大な芦生研究林に今この時いる人間はわれわれのグループのメンバーだけというシチュエーションに誇らしさを感じながら、2 日間の有意義で、楽しい体験をさせてもらいました。



由良川源流を登り詰め、杉生峠到着



芦生スギの伏条更新の講義



下谷の大カツラの前で全員集合

【コメント 渡辺弘之】

台スギや床柱になる予定だったスギが、放置(?)される姿を見て、林業の大変さを感じました。

とあるが、芦生への途中での北山杉の話と混同されているのかも知れない。京都北山杉は床柱生産に特化した産地、伝統的な技術で床柱を作り、芦生杉とは関係ない。放置?される意味がよくわからないが、クマ剥ぎやシカによる剥皮をいっておられるのだろうか。新植した造林地ではやはり許せないことだろうが、ここは国定公園中核の自然保護区である。天然林の健全な維持が求められているところである。そこではクマもシカも共存できる。クマ剥ぎがあっても、それが自然だ。

実習中、お話したが、林学科付置の演習林、伐採・搬出、造林・保育のための実習林であった。戦争もなく、契約通りに進んでおれば、すでにこのブナ林は消滅している。京都大学との契約、戦争中の伐採の中断、ダム問題の発生、自然保護思想の浸透など、多様な問題を潜りぬけ、やっと現存するのです。伐採も皆伐人工更新でなく、択伐天然更新法をとったことも、今からみれば評価されていると思います。

【これなんだろう・何故だろう】紅葉、黄葉、褐葉の仕組み

落葉樹の葉では、秋になり日照時間が短くなるとクロロフィルが分解される。この過程の中で生じる働きが紅葉、黄葉、褐葉を生む原因となる。その仕組みは何故? (答は 11 ページをご覧ください)



イロハモミジの紅葉



イタヤカエデの黄葉



コナラの褐葉

第 29 期自然大学 琵琶湖実習—琵琶湖（淡水湖）の生態（抜粋） 2024. 11. 3

琵琶湖博物館学芸員
自然と緑理事長 伊藤 孝美

《1 班》

○今回の琵琶湖博物館野外実習は、前日の大雨が嘘のような秋晴れで気持ちの良い一日を過ごすことができました。最初の滋賀県琵琶湖保全再生課（このような課があるというのは、県として琵琶湖を大切にしているんですね）の主査の方から、琵琶湖の概要やこれまでの水害・水不足・水質汚濁などの歴史と水質保全に向けた対策についてのお話がありました。琵琶湖が約 400 万年の歴史を持つ古代湖で、多様な固有種を有していることは水域生態系の講義で習いましたが、琵琶湖へ流れ込む河川が約 450 本あるのに流れ出るのは、瀬田川のみというのには驚きました。また、冬期に大気からの酸素が湖底層まで循環するけれども、春から秋や暖冬では、その全層循環が行われず水質が悪化してしまうとのこと。温暖化の悪影響が心配されます。京阪神の水源としての重要性から、琵琶湖の水質状況を細かく測定・観察する一方、生態系保全のため外来魚の捕獲や水草の刈取りなど継続して行われているの



滋賀県庁琵琶湖保全再生課
寺内主査の琵琶湖保全再生の講義

が素晴らしいと思いました。捕った外来魚や水草はどうやって廃棄するのか心配でしたが、どちらも堆肥として活用されているようで流石だなと感心しました。午前は、琵琶湖のプランクトン観察。まず、琵琶湖湖岸に行ってプランクトンを採取。学芸員の方からプランクトンネットの仕組みと投げ方を教わりましたが、「力んで投げるとその勢いで湖に落ちてしまうので注意すること」と聞いたもので、怖気づいてしまい手前にボチャン。でも、採取した湖水には、様々なプランクトンが一杯いました。。実習室で2種類の顕微鏡を使い、水を滴下したシャーレやプレパラートを覗いたら、ミジンコやワムシが回転したりスイスイ移動したり。ボルボックスや綺麗なクンショウモも見られて、ちょっと興奮しました。学生時代に、ウニの発生をずっと顕微鏡で観察していたのを思い出したりして楽しみました。午後は伊藤理事長の説明を聞きながら、博物館の南口からメタセコイアやスイショウ、センペルセコイア、コウヨウザン、アスナロ、ブナ、サワラ、ヒノキなど、高木が多い太古の森を歩きました。私には木の区別がつかず、芦生の森で習ったのに……と反省。縄文・弥生の森では、11月3日にお披露目となった樹冠トレイルの下でスギ根株の埋没木を見学しました。3000～4000年前はこの辺りはスギ林であったとか。ちょっと想像が付きません。湖岸ではホテイアオイの紫の花が見られましたが、研修の表紙の写真にあるような蓮は全く見られず、消えた原因は不明だが、環境の悪化や土壌の悪化が関与しているのだろうとのこと。問題解決してまた蓮の美しい花を見たいものです。集合写真撮影後、琵琶湖博物館を駆け足で回りましたが、時間が無くて一部しか見られなかったのが残念でした。

《2班》

○古琵琶湖と縄文、弥生の森の見学で、メタセコイアは中国で発見され、その話が戦後日本に入ってきて各地に植えられたのは、知識として知っていましたが、その昔、日本にもあったとは……。考えてみれば三木博士は、日本でその化石を見つけられたのだから、当然なのだけれど。三木博士は日本のどこでその化石を見つけられたのかな。午後、プランクトンを顕微鏡で見ました。ボルボックスの中に娘の集まりの丸い塊と、ワムシの卵が寄生した丸い塊があり、あの極微小な生物の世界にも食うか食われるかの世界があるんだと、改めて認識しました。もう少し見ていたかったです。楽しい時間でした。

○伊藤先生からの木々に関するたくさんのお話、論文の内容などもお聞きでき、知的な刺激を受けることができました。ホテイアオイに花が咲くことも初めて知りました。プランクトンを採集しての顕微鏡観察もとても楽しかったです。あのような生物、植物の生活環境をも破壊することなく人類は共生して行かないといけないと改めて感じました。有意義な時間を過ごせたことに感謝しております。

《3班》

○いいお天気の中、午前中は200万年前の森林を巡り、湖畔にて琵琶湖の観察をし、午後からはプランクトンの採取と観察を行う、意義深い1日を過ごせました。伊藤先生が、三種の樹木の葉を取ってください、その違いを知ることができました。田の脇にハンノキを植えて稲穂を干したことに、弥生時代(?)の稲作の知恵に驚きました。ムベの木を見て、天智天皇の「むべなるかな」を思い出しました。一杯実が落ちていましたが、昔の人にとっては、美味しい森の贈り物だったのでしょうか。午後からの実習はとても楽しかったです。湖から実際に水を採取するとは思っていなかったので、いい体験ができました。顕微鏡での観察で、くるくる回るボルボックスや、素早く走り回るミジンコ類に出会えました。いつまでもプランクトンが豊富で自然豊かな湖であって欲しいと、一番初めに聞いた、琵琶湖保全再生課の職員さん(お名前を忘れてしまい、申し訳ありません)のお話を胸に、帰阪いたしました。



淡水プランクトンの採取



淡水プランクトンの採取



プランクトンの検鏡観察



プランクトンの検鏡観察

○滋賀県に移住して4年程になります。琵琶湖は近いこともあり、毎日のように見ていました。滋賀レイカディア大学でも一応の滋賀県の環境は勉強していましたが、今回の実習で全く浅い知識だったと痛感しました。こんな近くで、プランクトンや縄文、弥生杉の森の痕跡、琵琶湖の環境の変化を観れるとは思っていませんでした。もっともっと自分の身の回りの動植物を意識していきたいと思いました。面白い事が一杯です。

○自分で琵琶湖の水を採集して、いろいろなプランクトンを光学顕微鏡で見た事が一番楽しかったです。ボルボックスやアオミドロの螺旋に自然の美しさを感じました。また、博物館内でノロを実際に見ることができ、テンションが上がりました。50 年前の赤潮大発生で主婦の石けん運動が起こり、私も洗剤から石けんに変えたことを思い出しました。その後も、様々な形で環境保全につながっている事を知り、近畿の水ガメを利用している者として、滋賀県民に感謝しています。

【1 班からの質問】 学習船「うみのこ」「うみっこ広場」など、うみという言葉が使用されていますが、地元の人々にとって、琵琶湖は「うみ」とよばれているのでしょうか？

【答(Wikipedia より)】

●古代の呼称

琵琶湖は元々、近淡海・淡海・淡海の海(あふみのうみ)・水海(すいかい)・近江の海・細波(さざなみ)・鳩の海(にほのうみ)などと呼ばれていた。

『古事記』においては、その伊邪那岐の大神は、『淡海』の多賀に坐すなり(上巻)』や『東の方追ひ廻りて近淡海国に到り(中巻)』といった用字で現在の滋賀県のことを表している。同書における琵琶湖を指す記述としては中巻の『いざ吾君(あぎ)振熊(ふるくま)が痛手追はずは鳩鳥(にほとり)の阿布美能宇美(あふみのうみ)迹(に)潜(かす)きせなわ』という歌謡のみが挙げられる。

『日本書紀』には『淡海』の海 瀬田の済に潜(かす)く鳥 目にし見えねば憤りしも』という歌謡をはじめとし、淡海の海・淡海の表記が多数見られ、近淡海の用字はほとんど見られない。同書における近江の表記は、天智天皇5年に是の冬に宮都の鼠、近江に向きとあるなど、奈良時代の近江遷都以降に顕著に現れる。

『続日本紀』の 717 年(養老元年)の条には行至近江国 観望淡海とあり、近江を国名、淡海を琵琶湖と使い分けていたことが示唆される。

近江の国の風土記引きて言わく、『淡海の国は淡海を以ちて国の号と為す。故に一名を細波国と言ふ。目の前に湖上の漣なみを向ひ観るが所以なり。』との文がある。

鳩(にほ)の海については、下って平安時代の『源氏物語』は「早蕨」の巻の『しなてるや 鳩(にほ)の海に 漕ぐ舟の夏帆ならぬとも逢い見し物を』

『千載和歌集』の

我がそでの 涙や鳩(にほ)の海ならん かりにも人を見るめなければ

-上西門院兵衛

『新古今和歌集』の

鳩(にほ)の海や 月の光のうつろへば 波の花にも秋はみえけり

-藤原家隆

などがある。琵琶湖を代表する鳥である鳩(カイツブリ)は、上述のように『古事記』にも表れており、後の 1965 年(昭和 40 年)には滋賀県の県の鳥にも指定されている。



●中近世の呼称

琵琶湖という呼称の最も古い用例は、木村(2001.)によると、室町時代の明応年間(1492 年 - 1501 年)に活躍した僧侶景徐周麟の漢詩集『翰林胡盧集』の中の七言絶句「湖上八景」における『瀟湘八幅 其の図案ずるに 長命寺の前 天下に無し 一景新たに添う有声画 袖中に携えて琵琶湖へ去る』である。

なお、琵琶湖を琵琶の形に喩えた例はこれよりも古く、比叡山延暦寺の僧侶光宗が 1311 年から 1347 年(応長元年から貞和 3 年)にかけて編述した『溪嵐拾葉集』に尋云。湖海是弁財天ノ三摩耶形ナル方如何。答。凡水海ノ形ハ琵琶ノ相貌也。』との記述がある。

次いで古い琵琶湖の用例は江戸時代の儒学者伊藤仁斎による 1645 年(正保 2 年)の漢詩「過琵琶湖作」まで待たなければならない。その後、同じく儒学者の貝原益軒が 1689 年(元禄 2 年)に若狭・近江を旅した際に記した日記『諸州めぐり 西北紀行』には次のような記述がある。

およそ淡海の海は、[以下琵琶湖の地形についての記述]。此湖の形はよく琵琶に似たり。堅田より北七里、東西広し。琵琶の腹に似たり。堅田より勢田まで四里は、東西狭し、一里の内外あり。たとえば琵琶に鹿首あるが如くせばし。勢田より宇治まで弥せばし。琵琶の海老尾に比し、竹生島を覆手に比すといへり。故に此湖を琵琶湖と云。

この記述は、上述の『溪嵐拾葉集』に沿ったものである。また、同年に松本村の原田蔵六が記した地誌『淡海録』第 1 巻には、「湖水を琵琶湖と名づくは、竹生島の天女音楽を好み給ふ故、海を琵琶湖と名づく、因みて神を妙音天女」と名づく、とある。

元禄年間から享保年間にかけてはほかにも、松尾芭蕉による俳諧文や朝鮮通信使の申維翰による『海游録』など、各種資料において琵琶湖の表記が見られる。さらに、江戸時代後期には伊能忠敬が 1807 年(文化 4 年)に「琵琶湖図」を作成するなど、地図上にも琵琶湖の表記が現れるようになる。なお、琵琶湖の語源については、上述の(弁財天の)琵琶とするもののほか、アイヌ語の「貝を採るところ」を意味する語に由来し、ビワ(ビハ)は水辺や湿原がある場所を指すという吉田金彦の説や、楕円形を表すビワ、枇杷の実の形に由来とする説もある。

会報川柳

神崎江

誕生日きようは自分をほめてやる

(句意)

毎日頑張っている自分。誰よりも自分自身が自分に優しくあること。自分の誕生日、大切に。

時々間は抜ける方が愛される

(句意)

まわりにいる愛される人の特徴ってこんな感じでは。

あきらめてうどんそうめん五穀米

あきらめて？ 五穀をブレンドしたうどん・そうめんは、ビタミン、ミネラル、食物繊維などを豊富に含み栄養価が高いそうです。元気で過ごしましょう。

(編集部)

腑に落ちぬガソリン価格コメ価格

同感です。どちらも高値で推移し、家計に影響を与えています。八月中旬のガソリン価格は全国平均一リットル一七五円で四週連続値上がり。又、九月以降の新米は五キロ四千円を超えると専門家は予測しています。腑に落ちません。

(編集部)

※神崎江(こう)は自然と緑理事
神崎トモ子さんの雅号です

観音竹(カンノンチク)の花が また咲いた

自然と緑理事 竹内 一郎

当会報の2年前(2023年9月号)に「観音竹(カンノンチク)に花が咲いた」記事を投稿しました。その時、「観音竹の花」で検索した結果「30年、40年に一度しか咲かない。一生に一度しか見られない。」とありました。ところが、我が家のカンノンチクの花が今年また咲きました。カンノンチクは、昭和40年代に起きた「観音竹ブーム」以降は多くの人々に親しまれているようです。「観音竹 花が咲いた」でAIに聞いてみました。

「AIの回答」

観音竹(カンノンチク)の花は数十年に一度咲く珍しい花です。

観音竹について：

- ・観音竹はヤシ科の常緑観葉植物で、中国南東部や東南アジアが原産です。
- ・国内では沖縄の観音様の聖地などに生えていたことから、その名がつけられたとされています。
- ・葉は扇のように広がり、和風やアジア風のインテリアによく合います。
- ・花の色は黄色、クリーム色、白などがあり、ピンク色の花を咲かせる場合もあります。
- ・観音竹は「日々の平安」という花言葉を持っています。

観音竹の栽培：

耐陰性が高く、直射日光の当たらない明るい室内が適しています。

- ・水やりは、乾燥に注意しつつ、湿気が多すぎないように管理します。
- ・剪定は、枯れた葉や古くなった葉を取り除く程度であれば、年間を通していつでも可能です。
- ・植え替えは、根詰まりを防ぐために必要です。

観音竹の花が咲くのは縁起が良い兆候とされています。



我が家のカンノンチクの花

観音竹の花が2023年に咲き、阪神タイガースは日本一になりました。今年も観音竹の花が咲き、阪神タイガースも好調です。しっかり応援します。

【7 ページの答】紅葉の赤色は色素「アントシアン」による。アントシアンは春から夏にかけての葉には存在せず、秋に新たに作られる。アントシアンは光の害から植物の体を守る働きを持っており、秋の老化の過程で葉を守るために働くと考えられている。

黄葉の黄色は色素「カロテノイド」による。カロテノイド色素系のキサントフィル類は若葉の頃から葉に含まれるが、春から夏にかけては葉緑素のため黄色は見られない。秋には葉緑素が分解することにより黄色が目立つようになる。カロテノイド色素も光による害から植物を守るために機能している。

褐葉は黄葉と同じ原理であるが、タンニン性の物質(主にカテコール系タンニン、クロロゲン酸)や、それが複雑に酸化重合したフロバフェンと総称されるフロバフェン褐色物質の蓄積が目立つためとされる。



ニシキギ



イチョウ



メタセコイア

【寄付等の御礼】

いつもありがとうございます

<切手、ハガキ、現金など>

6/22 寄付 城ノ下 様

7/20 寄付 飲み会有志 様

8/18 寄付 H.Y 様

ご寄付は下記までお願いします

ゆうちょ銀行口座名：
特定非営利活動法人 自然と緑

口座記号： 00900-7

口座番号： 150942

振込用紙の通信欄に

「寄付」と明記願います。



自然と緑の活動報告 2025年6月～2025年8月

◇6/12(木)	6月期理事会	15人
◇6/14(土)	自然と緑の自然観察会「摩耶山周辺」	13人
◇6/15(日)	第30期自然大学室内講義「水域生態系」	39人
◇6/17(火)	大阪経済法科大学 里山整備	4人
◇6/21(土)～22(日)	ステップアップ講座野外実習「馬ヶ瀬山」	16人
◇6/22(日)	近江馬ヶ瀬山ふれあいの森「定例間伐・炭焼き活動」	26人
◇6/25(水)	クラフト活動「流木盆栽」	12人
◇7/ 6(日)	ステップアップ講座「人と自然の博物館」	13人
◇7/10(木)	7月期理事会	18人
◇7/20(日)	第30期自然大学室内講義「大気と気候」	40人
◇7/27(日)	近江馬ヶ瀬山ふれあいの森「定例間伐」	16人
◇8/ 3(日)	第30期自然大学室内講義「土の生態学」	17人

-----お知らせ-----

「NPO 法人自然と緑」では
随時、会員を募集して
おります。ご友人、ご親戚を
是非お誘い下さい。

ご入会・更新は下記QR
コードをご利用下さい。



★編集雑記

日本の四季を彩る五節句の一つ「重陽（ちようよう）の節句」が、旧暦九月九日にあります。九は最大の陽数（中国の陰陽五行説のラッキーナンバー）で縁起が良い日だそうです。中国や台湾などのアジアの漢字圏では「久」と同じ発音で、永遠・長寿を意味する縁起のよい数字だそうです（日本では九は「苦」に連想され嫌われる場合もあります）。その「九（久）」が重なるのは特に良い日、九月九日「重陽の節句」です。家族の無病息災、子孫繁栄、不老長寿を願う日とされています。日本には奈良時代に伝わり、平安時代には宮中で菊を鑑賞する宴が催されたそうです。旧暦九月九日は現在の暦では十月中旬頃で菊の見頃になります。別名「菊の節句」とも呼ばれます。菊は邪気を払う力があると信じられ、菊を楽しむ行事は、菊合わせ（現在の菊品評会）、菊酒、被綿（きせわた、菊の花に綿を被せ菊の香りで身体を清める）、菊湯（風呂）などで長寿を祝ったそうです。行事食は栗ごはんです。菊の花言葉は、色別にもありますが、総合的には「高貴」「高尚」「高潔」とされています。

（イチロー）